

「ありふれたもの」

学 長 安 酸 敏 眞

いまから 69 年前に北海学園大学は創設されましたが、初代の学長である上原轍三郎は、入学式にあたってホイットマン (Walt Whitman, 1819-92) の詩集『草の葉』Leaves of Grass から、「開拓者よ、おお開拓者よ」(Pioneers! O Pioneers!)を引用しつつ、北海学園大学のスクールモットーを「開拓者精神」(Pioneer Spirit)と決めました。その同じ詩集のなかに、「ありふれたもの」(The Commonplace)と題された詩があります。本日これを引証しながら、卒業される皆さんにはなむけの言葉を述べようと思います。

ありふれたものをわたしは歌う、
健康であるに金はかからぬ、気高くあるにも金はかからぬ、
節制をこそ、虚偽や、大食、淫欲はお断りだ、
晴れやかな大気をわたしは歌う、自由を、寛容を、
ありふれた昼と夜とを——ありふれた土と水とを、
君の農場、君の仕事、商売、職業、
そして万物を支える堅牢な地面さながら、それらのものを支えている民主的な知恵を。
ホイットマン『草の葉(下)』岩波文庫、1971 年、380 頁。

ここで詠われている、大気も土も水も、昼と夜の交替もまた、きわめてありふれたものです。「ありふれた」と訳されたのは、“commonplace”という語です。これは通常「ごく普通の」「陳腐な」という意味合いをもつ言葉です。少し説明的にいえば、「頻繁に生起し、あるいは頻繁に見聞ないし経験されるので、特別なものとは見なされない」(happening often or often seen or experienced and so not considered to be special)という意味です。

英語の“commonplace”は、ラテン語の“locus communis”の逐語訳です。それはさらにギリシア語の“koinos topos”に遡ります。いずれの古典語も、「共有／共通／一般／公共の場所」を意味します。そこから転じて、一般的に見うけられるので、独創性や新鮮味に欠け、特別な関心を引かない、つまり「ごく普通の」「陳腐な」という意味が生じたのです。

さて、大気も土も水も太陽も、わたしたちの日常生活に欠かせない貴重なものではありませんが、それらは誰にでも分け隔てなく普通に与えられているので、きわめてありふれたものです。しかしあの世界的経済学者の宇沢弘文(1928-2014)は、この「ありふれたもの」に特別な価値を見出し、これを大事にする経済理論の構築と実践に後半生を捧げました。

ノーベル経済学賞に一番近かったといわれる宇沢は、アメリカのスタンフォード大学やシカゴ大学での最先端の研究生活を突然打ち切って帰国し、その後はひたすら「《陰^{シャドウ}》の経済学」の理論家および実践家として歩みました。彼の活動を買っていたのは、「社会的共通資本」という考えです。彼はそれを英語で“Social Overhead Capital”と表現しましたが、ときには“Social Common Capital”と表記されてもいます。いずれにせよ「社会的共通資本」とは、

一つの国あるいは特定の地域に住むすべての人々が、豊かな社会的・文化的生活を持続的・安定的に維持することを可能にするような社会的装置を意味します。社会的共通資本と見なされるものは、たとえ私有ないし私的管理が認められるとしても、社会全体にとって共通の財産として、社会的な基準に従って管理・運営されなければなりません。

宇沢は社会的共通資本を、(1)自然環境(大気、水、森林、河川、湖沼、海洋、湿地帯、土壌など)、(2)社会的インフラストラクチャー(道路、交通機関、上下水道、電力・ガスなど)、(3)制度資本(教育、医療、金融、司法、行政など)の三つに大別しています。宇沢によれば、これらのものはすべての人が共有すべきものであって、決して市場的基準によって支配されてはならないし、また官僚的基準によって管理されてもならない、ということです。これは新自由主義の経済理論とは真っ向から対立する考え方です。

宇沢はシカゴ大学において、新自由主義者のフリードマン(Milton Friedman, 1912-2006)とよく論争したそうですが、後者が唱道した市場原理主義は、ここ数十年荒れ狂う「欲望の資本主義」という鬼子を産み落としました。宇沢は一貫してそれに反対し、大気などの自然環境は私益追求の対象としてはならず、むしろ大事なものは金銭に換算できない、と主張しました。フリードマンはノーベル賞を受賞し、宇沢はその栄誉に浴しませんでしたが、後世の人々の判断は逆転するのではないのでしょうか。

実際、2015年9月、国連サミットはSDGs(持続可能な開発目標)を採択しました。これはもとをただせば、宇沢が唱えた「社会的共通資本」の考えに淵源します。宇沢はすでに70年代中葉から、「社会的共通資本」の理論を世界に向けて発信し、地球環境、教育、医療、金融の問題などに対して警鐘を鳴らし続けてきました。わたしはたまたま宇沢の同郷人なので、彼に特別な尊崇の念を抱いていますが、彼が説いた「社会的共通資本」の考えは、若い人たちにもっと受け継がれなければなりません。

19世紀アメリカの詩人ホイットマンも、宇沢と共鳴し合うものを多くもっています。ここで取り上げた「ありふれたもの」という詩は、人類の共通の(common)生活の場(place)としての地球環境の問題に密接に関わります。富裕な現代人は贅沢な食事を楽しみ、健康維持のために高い会費を払ってフィットネスクラブの会員となったり、教養を身につけるためにカルチャーセンターに通ったりします。しかしホイットマンは、「健康であるに金はかからぬ、^{かっぱ}気高くあるにも金はかからぬ」と喝破します。日々の生活において節制し、身体を動かして労働し、自由と寛容の精神を身につけ、民主的な知恵で処すれば、人間として気高く生きることができるといいます。

コロナ禍での生活は楽ではありませんが、「ありふれたもの」を大事にして生きてください。これをもって、卒業生の皆さんへのはなむけの言葉といたします。